中国の三角縁神獣鏡　1　　２０１４年３月１１日

王趁意氏論文　「一面帯界欄的同向式三角縁神獣鏡」
中原文物２０１０／４　全訳と問題点

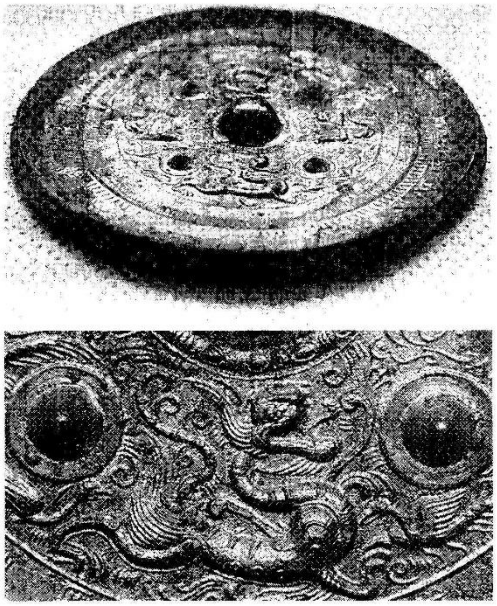
平松　健

Ⅰ　「中国にも三角縁神獣鏡が出土する」
と言って話題をまいた記事

朝日新聞２００７年１月２４日朝刊の記事が専門家以外にも話題を提供した。本件は『季刊邪馬台国』９５号〈２００７年６月〉にも掲載された。

以下引用

中国で三角縁神獣鏡が発見された？
洛陽で発見されたという鏡



（上）洛陽で見つかったといわれる神獣鏡（下）鏡の下方に配された神獣の文様＝いずれも河南省鄭州市で、青山芳久撮影

邪馬台国の女王・卑弥呼が中国・魏（２２０～２６５）の皇帝からもらったとも言われる「三角縁神獣鏡」。製作地などをめぐり論争の続いているこの銅鏡が中国本土で見つかった、とのニュースがこのほど同国で報じられた。本当なら、東アジア古代史上の大発見だ。でも、写真を見た日本の研究者の多くは「？」。背後にはこの鏡をめぐる研究者の認識の相違があるようで……。　（宮代栄一、塚本和人＝上海）

「三角縁神獣鏡」は、日本古代史上で最も注目を集めている鏡の一つだ。出土総数は五百数十枚。縁の断面が三角形で裏に神仙思想に基づく神仙や霊獣の模様があり、こう呼ばれている。

銘文に魏の地名や年号などがあることから、中国の歴史書「魏志倭人伝」に記述がある、魏帝が邪馬台国からの使者に与えた「銅鏡百枚」にあたる主張する〝中国鏡説〟と、中国本土では実物が一枚も見つかっていないことなどから、日本国内で作つたとみる〝国産鏡説”が対立。その分布から推定されるという邪馬台国の所在地ともからんで、論争が続けられてきた。

今回見つかった鏡は、直径 21・５センチ。河南省に住むコレクター・王趁意さんの所蔵品で、王さんは昨年夏、「洛陽で珍しい鏡が見つかった」と聞いて購入したという。出土地や出土状況などはよくわかっていない。

縁の断面は確かに三角形。鉦（中央のつまみ）にあけられた穴の形は半円形で、鏡の一番外側から、三角形などが連なる文様帯、「吾作明竟（鏡）……」で始まる 28 字の銘文、同じ向きに並んだ計４体の神仙と霊獣が、順に表現されている。

この鏡について先月、「中国文物報」に論考を発表した陝西師範大教授の張懋（ぼう）鎔さんは、「直径が 21～23 センチの範囲に収まることや、縁の断面が三角形であることなど、

青銅器研究で知られる京都大名誉教授の樋口隆康さんが著書『三角縁神獣鏡綜鑑』(92年)で提示した三角縁神獣鏡の条件に合致している。この鏡の研究を大きく前進させる発見」と評価する。

写真を見た樋口さんも「大変おもしろい。これまで中国で三角縁神獣鏡が見つかったという話はみんな駄目だったが、今回の鏡は違う。魏で作られたということを証明する発見ではないか」と話す。

これに対し、他の日本の研究者の反応はいま一つ。

「確かに縁の断面は三角形だが、文様の構成などが、私たちの言う三角縁神獣鏡とはやや異なる」というのは、大阪大教授の福永伸哉さん。

京都人教授の岡村秀典さんも「近いけれども、むしろ画像鏡から生まれた斜縁神獣鏡と呼ぶべきもの」と語る。

なぜ見解が異なるのか。東京大非常勤講師の車崎正彦さんは、「十数年前なら今回の鏡は三角縁神獣鏡と言われたかもしれませんが……」と話す。

実際、89年に京都人で聞かれた展覧会の図録に付された三角縁神獣鏡のリストには、今回の鏡とよく似た愛知県東之宮古墳の出土鏡が掲載されていた。似た鏡は中国の山東省からも出土しており、これらも「当初は三角縁神獣鏡ではと言われた」という。

「でも、その後、研究が進んで銘文などが違うことが分かり、今では別系統と考えられるようになったのです」と車崎さん。こうした研究の進展で、当初は三角縁神獣鏡と考えられた、数枚～十数枚の鏡が、リストから外されることになったとみられる。

分類・定義の難しさを指摘する研究者もいる。大手前大助教授の森下章司さんは「三角縁神獣鏡を少数の項目で定義するのはとても難しい」と指摘する。今の日本考古学では「縁の断面が三角で神獣の文様がある鏡＝三角縁神獣鏡」とは限らない。縁の断面や文様の種類に加え、文様構成やその表現、銘文、字体、鉦の穴の形など、
複数の要素がからみあって「三角縁神獣鏡」という”鏡式〃を形づくっていると考えるからだ。しかし、こういった部分は海外の研究者には見えにくい。

研究が進んだ結果、用語の定義などが逆にあいまいになりつつある。今回の認識の相違は、図らずも日本考古学の現状の一端を映し出すことになったとも言えそうだ。

引用終わり

以上問題になっている三角縁神獣鏡について樋口隆康氏は『三角縁神獣鏡綜鑑』（新潮社、一九九二年刊）のなかで、六つの条件を、提出している。

（１）直径は、二十一～二十三センチのものが、もっとも多く、まれに径十九センチや二十五センチのものもある。

（２）鏡の縁の断面が三角形を呈している。

（３）外区は、鋸歯文帯、複線波文帯、鋸歯文帯の三圏帯からなる。

（４）内区の副圏帯は銘文帯、唐草文帯、獣文帯、波文帯、鋸歯文帯のいずれかが多い。

（５）主文区は、四または六個の小乳によって等間隔に区分され、その間に神像と瑞獣を、求心式か同向式に配置する。

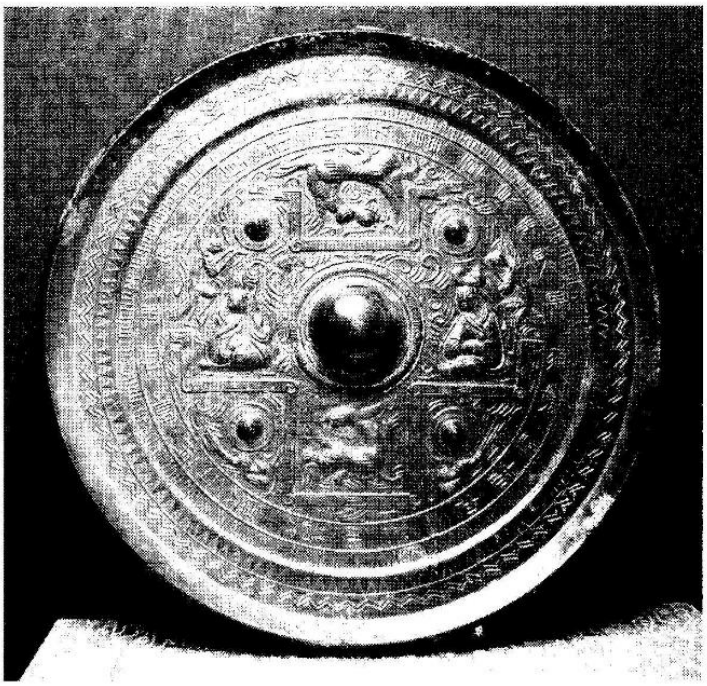
（６）銘文は、七字句数種と四字句一種がある。

Ⅱ　朝日新聞の記事のもととなった論文は下記のものである。

境界枠付同向式三角縁神獣鏡について　全訳（原文掲載略）

「中原文物」２０１０／４　王趁意（河南省鑑定評価委員会）

要旨　山東省（旧）盧国の西南に於いて後漢晩期の境界枠付同向式三角縁神獣鏡が発見され、日本の三角縁神獣鏡の発祥の地を探し求めるのに重要な手がかりを提供することになろう。(注＝日本では重列神獣鏡または、銘帯階段式とも呼ばれている)



図一　帯界栏同向式三角缘神兽镜

三角縁神獣鏡は日本の学会について言えば、非常に重要で知り尽くされた鏡種であり、今までに日本国内ですでに五百面以上出土している。２００６年において、中国で発見させた頭首の鏡と日本で出土した三角縁神獣鏡の形態は非常に接近した鏡であったから(注１)、日中両国の学会で非常な反響を引き起こした。近年来我々は洛陽を中心として、北方地区に範囲を拡げ、深く調査をおこない、併せ、魯の西南に於いて後漢晩期の境界枠付同向式三角縁神獣鏡を発見し、日本の三角縁神獣鏡の発祥地を探し求めるのに重要な手がかりを提供することになった。(図１)

この鏡は直径１７，５センチ厚さ（縁の高さ）０．７センチ、重さ５４６グラムである。半円形の鈕を持ち、鈕座は丸い。鈕座の外側に泥鰌の背のような模様が一周しており、上側は幾つもの楕円形の文様間に短線の文様がある。主文帯には四つの乳があり、二組のU字形の段階があり、主文帯を四区間に別けている。鈕の左側には東王公がいて正座している様子で、頭には三山冠を戴き、右襟の大きな衣をつけ、目鼻立ちがはっきりして、容貌は端正、伝統長衣にゆったりとした袖、左手は胸の方に伸ばし、右手は腹部にあて、頭の後ろのほうに長い耳の兎の形をした神人が侍っている。鈕の右側は西王母であり、また端正に座った様子で、櫛が非常に大きな双髪髷になっており、右の耳を強調しており、顔立ち秀麗、頭の後ろには羽根を持った仙人が侍っている。

鈕の上側の段階枠の中に壮健で頑強な瑞獣がいて、頭には角があり、口を大きく拡げていて、鋭い牙が明確に見える。この文様は倒置して作っているから、頭が下を向き、四肢が上を向いており、これは竜である。鈕の下側の段階枠にもまた瑞獣がいる。四肢壮健で、長い尾は上に翻っているが、頭部ははっきりしてなくて分からないが、耳が小さいようで、たてがみは長いが角はない。これは虎である。この二獣の両側の乳の下に飛び回る長尾の鵲鳥がいる。(図二)

この鏡の主文帯外の銘文帯は次のようになっている。

吾（作）明竟真（大）（巧）、上（倒写）有竟母願（富）貴、原□虎右大倡亘、貝主照東須質堅、赤誦三

合計２６字である。**隷書体の銘文は極めて明晰**である。**但し簡略、欠画、倒置、反対字あり、かなり弁識しがたい**。銘文帯の外は一周櫛文があり、縁の一周は鋸歯文、複線波文帯、最外辺は勾配がきつい正三角形の縁となっており、その角度は８３度を測る。（図３）

わが国では後漢の境界枠付神獣鏡は比較的まれな鏡の類型であり、孔祥星先生、劉一曼先生の相当多く収録された『中国銅鏡図典』の中にも収録されていない。平縁の境界枠付神獣鏡はたまに見ることがあるが、それが三角縁であることは極度に少ない。この鏡の製作は精緻であり、文様は明晰、品質、版質均等にして良、装飾面は半ば銀白色、半ば淺漆喰古色、鏡面は北方坑口の鉛白色である。この鏡の採集地は魯の西南であり現在淮河の流域で、三国時代は曹魏の琅琊国に属する。古黄河下流域は歴史上百度以上も川筋が変わっているが、この区域は古代北方黄河流域に属する。三角縁に類する銅鏡が後漢から三国時代にかけて流行したが、この鏡もこの時期に属すると言えよう。

境界枠付三角縁神獣鏡はまた、日本の三角縁神獣鏡の一類型であり、この類型の銅鏡を日本樋口隆康先生の『三角縁神獣鏡新鑑』（注２）の中に一例見ることができ、すなわち、日本愛知県犬山市東之宮古墳出土、正式名称「銘帯階段式二神二獣鏡」である。（図４）

（中国で）発見したこの境界枠付三角縁神獣鏡と日本の東之宮古墳鏡を比較すると、多くの相似するところがある。① 両鏡とも正三角形に鋭く尖った縁を持っている。② 鏡の縁の区域に一周の鋸歯文帯一周の複線波文帯を有し、その他の日本の三角縁神獣鏡が縁の文帯部分に一周の複線波文帯を挟んで二周の鋸歯文帯があるところが違うが、この二鏡は完全に同類である。③ 二鏡の鈕と鈕座区の文様は完全に同類である。④ 均等に４乳が対照的に配置されている。⑤ 二重のＵ字形階段が上下二配置されている。⑥ 主神は等しく東王公と西王母である。⑦ 鈕の上と下に均等に辟邪と白虎が置かれている。⑧ 主文帯の一番外側は一周の銘文帯と櫛文帯が一周している。

图二　带界栏同向式三角缘神兽镜拓片

この鏡と愛知県犬山市東之宮古墳出土三角縁神獣鏡の最大の相違点は鏡の銘文にある。二鏡の銘文の書体は同じく漢の隷書であるが、内容の差異が比較的多きい。東之宮鏡の銘は、

吾作明竟四夷服、多賀国家人民息、胡虜殄（歹＋尒）威（滅）天下復、風雨時節五穀孰（熟）長保二親得天理器、傳告後世樂毌極

〔注＝三木太郎氏訳『古鏡銘文集』１４０ページには「吾が作りし明鏡は四夷服（もち）

い、国家を賀すること多く、人民息えり。胡虜は殄滅して天下復す。風雨の時節は五穀熟し、とこしえに二親を保ち、天力を得ん。後世に伝え告ぐれば楽しみ極まり毋（なか）らん」とある〕

であり、両者が「吾作」から始まることは一致している。

この境界枠付三角縁神獣鏡と日本東之宮古墳出土の銘帯階段式三角縁神獣鏡とを較べると寸法上の差があり、前者は直径１７．４センチ、後者は直径２１．１センチである。すでに知られた資料によればこの種の寸法上の差異は日本の三角縁神獣鏡の中には存在するものである。樋口隆康著『三角縁神獣鏡新鑑』一冊だけに掲載された１７０余面の日本の三角縁神獣鏡のなか、寸法が１７センチ前後のものは次の通り。

図三　边缘区局部

図版二九下鏡式５７　三角縁銘帯四神四獣鏡片　１８．０センチ、長岡京支付近出土
図版五二上鏡式１０３　三角縁獣帯三神三獣鏡　１７．１センチ、大丸山古墳(山梨)
図版八八上鏡式Ｊ５０　三角縁二神二獣鏡　１７．２センチ、天神山古墳（奈良）
図版八八下鏡式Ｊ５１　三角縁二神二獣鏡　１７．４センチ、天神山古墳(奈良)

以上の鏡例から分かる通り、この二つの鏡は、寸法上は違うが同一種類であり、本質的相違はない。

日本の三角縁神獣鏡の中、銘帯階段式二神二獣鏡なるものはその形態が比較的特殊な類型となっており、同向式や求心式の日本の三角縁神獣鏡と比較して特徴が簡略であり、付加条件が少ない。それには標準的な笠松文様がなく、縁部分は二周の鋸歯文帯が、一周の複線波文帯を挟むという、硬直的条件、それは他の類型的な日本の三角縁神獣鏡の必須条件というべきものだが､それがない。しかし、中国大陸で発見されたこの境界枠付三角縁神獣鏡との比較では、かえって相類似しているのであり、一対一の比較研究をすることが直接可能となるのである。換言すればこの境界枠付三角縁神獣鏡と、日本の愛知県犬山市の東之宮古墳から出土した同類形の銘帯階段式二神二獣鏡とは、銘文が不同であること、寸法がやや小ぶりであることの末節的差異を除けば、その余はすべて一致しているのである。まさにこれは日本の三角縁神獣鏡の源を探し当てる最新の現物の発見である。

事実、ここ数年洛陽を中心として調査探究し、すでに陸続として後漢晩期から三国西晋

早期の三角縁神獣鏡、三角縁龍虎仏像鏡、三角縁笠松紋神獣鏡及び、当境界枠付三角縁神獣鏡等、十余面の銅鏡が発見されており（注４）、これは後漢魏の時代の洛陽地区が日本の三角縁神獣鏡の淵源である(注５)という学術的推論の証明の一助となるであろう。

注１　張懋（ぼう）鎔　「試論　洛陽で発見された三角縁神獣鏡」『中国文物報』２００６年１２月２２日第七版

注２　樋口隆康『三角縁神獣鏡新鑑』図版三上　学生社、２０００年

注３　同上

注４　王趁意「三角縁神獣鏡親発現」『中原蔵鏡聚英』２０１０年Ｐ４１以下、中州古籍出版（注＝同書には神獣鏡の章で、平縁画文帯神獣鏡１面、三角縁神獣鏡８面、三角縁青龍白虎鏡１面、三角縁画像鏡１面、三角縁仏飾蓮華鈕竜虎鏡１面、三角縁瑞獣鏡１面、合計１３面〈うち三角縁とつくもの１２面〉を中国発見として掲載している)。下記Ⅲを参照

注５　張懋鎔「再論洛陽発現的三角縁神獣鏡」『陝西歴史博物館館刊１４』三秦出版社２００７年。

Ⅲ　『中原蔵鏡聚英』　王趁意著にある、三角縁神獣鏡と称するもの（１２面)。

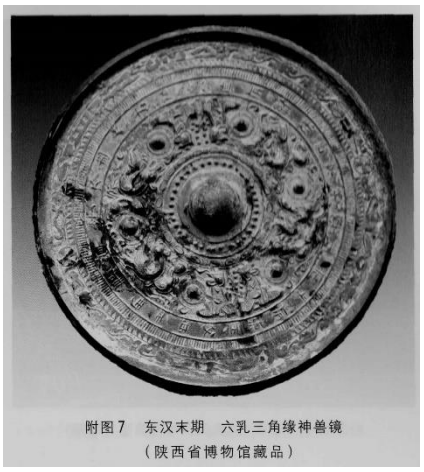
附图2-1　东汉晚期　对称式三角缘神兽镜
（陕西师范大学藏）

附图3-1　汉末、三国　对称式三角缘神兽镜
（王趁意藏品）

附图4　三国　三角缘青龙白虎镜（河南开封博物馆藏品）

附图5-1　东汉　环绕式三角缘神兽镜

附图6-1　汉末　六乳三角缘神兽镜



附图7　东汉末期　六乳三角缘神兽镜
（陕西省博物馆藏品）

附图8-1　东汉晚期　同向式三角缘神兽镜
（王趁意藏品）

附图9-1　东汉晚期　麾幢纹三角缘神兽镜
（王趁意藏品）

附图10　汉魏　三角缘画像镜（洛阳博物馆藏）

附图11　洛阳博物馆　三角缘画像镜

附图11-1　三国、西晋　三角缘佛饰莲花钮龙虎镜

附图12　三角缘瑞兽镜（开封博物馆藏）

Ⅳ　王趁意氏論文（中原文物２０１０／４記載の帯界欄的同向式三角縁神獣鏡について）の問題点。

１　中国出土ということについて

王趁意氏はこの鏡を山東省（旧）盧国の西南において発見したと書いてある。日本においては、出土という場合、古墳ないし遺跡から発掘によって出土したもののみを「出土」と称し、基本的には発掘調査書などで細かくその出土状況など記載されている。この場合ははっきり日本出土と言えるものである。もっとも考古学が学問として成立する以前に、一定の学者や有力者が発掘しているケースがあるが、この場合も多くは書類に残っており、一応日本出土ということができるであろう。

ところが、中国の場合、発見ないし、取得という言葉が頻出する。古物商から入手する場合も発見ないし取得である。とうてい出土とはいえない。その点、博物館蔵とだけある

ものも、出土品かどうか精査すべきものである。

もう一つ重要なことは、コピー大国であるということである。鏡とは別の話であるが、以前（２０１１年)、円仁の石刻が問題になったことがある。ほぼ同じものが二種類出てきて、一方は唐代のもの、一方は明代のものと、東大や明大の研究者が研究会を立ち上げて、まことしやかに論じられたことがある。素人から見れば、中国に渡ってきた日本の僧のために、唐代と明代に二種類も石刻を作ることがあるだろうかと思われる。この問題は書道史家の飯島太千雄さんが捏造と断定して、立ち消えになったと記憶している。同じ問題は井真成の碑文にもある。日本史に載ってない人物はともかくとして（多利思北孤も日本史には載っていない)、発見された場所が誠に曖昧なうえ、上部の一行分が削り取られている。また書かれている書式が当時の書式でないことや、ご丁寧にあとから出てきたという格納箱が石碑より小さいなどの疑問が多々ある。しかし世の大家がこの碑文は真性というと、今は否定する人はいない。

一般の商業商品は言うを待たずコピーの盛んな国であるが、考古学的作品こそ、慎重な判断が必要なのではないかと思われる。

２　三角縁神獣鏡の範疇について

上で述べた模造品の可能性はひとまずおくとして、この論文でいう鏡は少なくとも樋口隆康氏の提唱する三角縁神獣鏡には該当しない。径が小さい上に文様の順序も一致しない。また銘文についても（後述)、樋口氏の言うパターンには該当しない。またⅢに挙げている王趁意氏の１２の例も、多くは斜縁神獣鏡であり径も小さい。

ただ、一つ指摘しておかなければならないことは、王趁意がこの鏡と対比する東之宮古墳出土の銘帯階段式二神二獣鏡である。この鏡については、王趁意氏みずから相違点を指摘しているが、樋口氏自身はこの銘帯階段式二神二獣鏡を三角縁神獣鏡と認定しているが、他の多くの学者は三角縁神獣鏡と認定していない(例、下垣仁志氏、三角縁神獣鏡研究事典)。

３　銘文から見る模造性

①　王趁意氏はこの鏡の銘文について次のように書いてある。

「この鏡の主文帯外の銘文帯は次のようになっている。
吾（作）明竟真（大）（巧)、上（倒写）有竟母願（富）
貴、原□虎右大倡亘、貝主照東須質堅、赤誦三

合計２６字である。**隷書体の銘文は極めて明晰**である。**但し簡略、欠画、倒置、反対字あり、かなり弁識しがたい**」。

現物が直接検証できず、原書にある写真も鮮明でないため、拓本版の写真の銘文だけを切り出すと右のようになる。字そのものも非常に不鮮明である上、およそ文字として把握せず、図案と考えているフシがある。５字目の上は上下

転倒、中国人には考えられない。

これは左文字の発生とは基本的な違いがある。なお鏡面上の文字で、推測すれば王趁意氏の言う文字になると思われるが、・印の文字は『隷書大字典』にも見えない。なお篆書には「虎」「願」「師」の銘文中の文字に似た文字が見える（『中国篆書大字典』台湾大通書局発行）。

最大の問題は、上という字が転倒しており、およそ漢字が読める人が書いたとは思えない。文書全体も、筆者は浅学にして意味不明である。要するに文字の分からない人が、真似て作製したとしか考えられない。王趁意氏は,銘文は立派な隷書だと言うが、凡そ専門家が書く隷書だとは思われない。

②　舶載鏡の要件としての銘文

富岡謙蔵氏以来多くの学者が、三角縁神獣鏡魏鏡説をとり、その最大の根拠は「銅出徐州」をはじめとする銘文にあった。その後銘文のない三角縁神獣鏡と区別するために、銘文のある三角縁神獣鏡を舶載鏡、ないものを仿製鏡と称するようになり（厳格にはそのような区別は無意味であるが)、その説の根底には、三～四世紀の日本人に漢字が読めるはずはない、考え方が横たわっている。その後この区別は細分化されるが、車崎正彦氏などは現在もなお「銘文のある三角縁神獣鏡は中国製である」という考え方を変えていない。

しかし銘文が読めるかどうかを判断基準とする場合、二つの大きな問題に直面する。一つには、卑弥呼の時代に（正確にはもっと前から）漢字が読める日本人（あるいは日本に在住する中国人）はすでに日本にいた、もしそうでなければ魏の皇帝が卑弥呼に与えた詔書は全く無意味である。逆に卑弥呼の側から国書を上奏していたから、当然に倭国側に漢字を読み書き出来る人がいたことを意味する。

もう一つの問題は、王趁意氏の提示する今回の鏡の銘文は漢字が十分に読み書きできる人が作ったとは考えられないことである。漢字を図案として、真似て書いたとしか思えない。それが中国で作られたというには、少なくとも銘文としては薄弱である。読める銘文ではないからである。

③小結

この鏡は魏の時代に魏の人が作ったという根拠にならない。魏の時代の魏の人は、あえて漢字らしからぬ文字を書くとは考えられない。むしろ現代の人が故意に分からないような字でもっともらしく作製したという方が遙かに理論的である。

以上